槍の遺言

小田忠生

（1）

権現堂への参拝を終えた謙信は、いつものように帰路、大浦吉之助の屋敷で休んでいた。

謙信にとって権現堂への参拝は二つの意味を持っている。一つは、春日山城の裏手から徒歩で十五分ほどの距離にある権現堂に参拝するために、裏門を回り、下界の様子を見ることと、もう一つは権現堂の近くに屋敷を構えている大浦吉之助と情報の交換をしたり、分析をしたりする場でもあった。

吉之助の家の南に向いた縁先に腰掛けて、二人で周りの風景を眺めながら話し、時には家の中に上がり込んで酒を酌み交わすこともある。

今日はよく晴れていたので、謙信は縁先に腰掛けていた。

正面には平野が広がり、左手には日本海が丸く平野に食い込むように白い波が線を描き、その奥は霞むように山並みが連なっている。幾たびもの戦で通った関東への道も、信濃への道も糸を落としたようによく見えた。

目の前の山々は薄い緑色で、所々にぼかしたように新芽の固まりが浮き上がっている。

「吉之助、槍は錆びておらぬか」いつもの謙信の口癖である。

「光っております」吉之助は答える。二人の挨拶はこれで十分だった。

「吉之助、また暖かい季節になったな。この山は今の時期が一番美しい」

いつもの謙信の言い方ではない。

こんな時は大事なことを言い出す前触れであることは、長年の習慣で分かっていた。関東出陣の作戦で頭がいっぱいなのだろうと、吉之助は自分の持っている情報の整理をはじめる。

「ところで、砦衆は元気かな。今度の関東行きは大事な戦になるからな。それにこれからは田植えどきだ。忙しくなる」

吉之助は謙信が戦の時期を田植え前に終わらせたいと計算していると確信した。

戦ともなれば、専門の武士団がいるわけではなく、農民が戦闘員としてかり出されることになる。だから農作業と重ならないように考えているのである。

昨年の暮れに関東出陣を決めていたが、予想外なことが起こったのかもしれない。

他人の前では決して迷うような態度を見せない謙信だが、吉之助の前ではふとした不安の表情や苛立ちの感情をむき出しにすることも多い。

謙信と吉之助は林泉寺のときから一緒だった。それだけ気心も知れているし、お互いに許

し合える隙間を持っていた。
槍の名手といわれた吉之助を表舞台から情報の収集と分析を専門にする裏の世界に引き込んだのは、この信頼関係があってのことだった。
このところの謙信は、外出するときも自分の周りに気を配り、近距離の権現堂の参拝にさえも警戒を怠らなかった。いつでも吉之助の配下の者が影で警備に当たっていた。
「吉之助、このところ上田の動きがおかしい。都合のいい情報ばかりじゃ。何かが動いていると睨んだが、そちの情報を聞きたい」
吉之助はやっと本題に入ったことで、一気に頭の中が整理できた。
「上田郷で、妙な噂が出ております。何でも春日山の城下で夜になると男のうめき声がどこからともなく聞こえてくる。しかも雨がしとしとと降る晩に限って必ず聞こえてくるという噂でございます。ところが、実際の城下ではそのような事実も噂もありません。上田郷だけに広がっていることがむしろ変です」
吉之助は一息入れ、そっと謙信の横顔をみてから続けた。
「どうやら、叔父上（義理の兄にもあたる）の長尾政景様の溺死のとき、お供をしていた者が、酒の勢いで昔の話を無念そうに話したことがきっかけのようでございます」
「今頃になってなぜ流す」
吉之助は一瞬、間をおいてから言った。
「上田衆の怨念かとも」
「誰に対する？」
「勿論、お館さまです」
こういう時の吉之助の言い方は、単刀直入である。それが謙信を不快にするどころか、信頼の下地にもなっていた。
「政景どのの死をお館さまの所為にすることで、戦の前の混乱を避けるねらいかとも思われます。おそらく、今度の関東出陣に絡んで、先鋒隊は上田衆が当たることになるのでしょうが、そのための規律がゆるんだか、別の引き締める理由があったのでしょう」
謙信はちらっと空を仰いだ。
「別の理由とは？」
「何しろ長尾家の争いは根深いものがありますから。政景どのが亡くなり一番得をしたのは誰か。それはお館さま以外にない。そういう考えもあるでしょう」
「政景が亡くなり、上田衆の力が弱まればいいなどとは一度も考えたこともないわ。その証拠に次男の喜平治（景勝）を養子として引き取ったではないか。それでも不満があるというのか」
謙信は唇の端を曲げるようにして笑った。だが目は笑っていなかった。
「ところで、吉之助、そろそろ季節もよくなった。あちこちで動き出すからな」
「はい、砦の配備も、住人も十分訓練されております」
「それならよい。なにしろ今度は関東だからな、少し長引くかもしれん。どうしてもその隙

に西が手薄になる。信長などが懲りずに攻めてくるやもしれん。配備も慎重の上に慎重にしておかないとな」
「西が空けば東、東が空になれば西と、水は低い方に流れるという林泉寺の和尚の教えですな」
「林泉寺といえば、あそこの梅の木は今年は沢山実を付けそうか」
そういいながら、庭の先にある梅の古木を指さした。
ちょうど、吉之助の妻「お静」が小さな器に入れた梅干しとお茶の入ったお盆を手にして二人のそばに座った。
「おお、いつもの梅干しか。この梅干しは天下一品じゃな。特別な秘伝でもあるのか」
「何もございません。真心と、それに梅の実がいいからでございましょう」と二人の顔を見ながら笑った。
「そうか。林泉寺の梅だからのう。二人でよく遊んだ木だ。何でも梅の木はいじめるほどいい実をつけるというからな」謙信は吉之助と目を合わせて笑った。
「吉之助、そなたは儂を憎んでおるか」
突然の質問に吉之助は返事に窮した。
「そちほどの槍と知力があれば、今頃は城内に屋敷があるか、城の一つくらいは持っていてもおかしくはない。それを儂の我が儘で表から消えてもらった、そのことに不満はないのか」
吉之助は自分の心を見透かされたような気まずさを感じた。
確かに以前は、戦場で長い槍をぶんぶん振り回し、敵を倒しながら一直線に敵将に向かっていく光景を思い描いたりした。だが、最近ではすっかり自分の落ち着き場所を見つけたような気分になって、満足していた。
春日山城は山城である。北は日本海、南には高田が原が広がり、西は屏風を立てたように山々が春日山を囲んでいる自然の要塞である。
その地形を利用した春日山城は、蛇がとぐろを巻いた形にも見え、頂上が一の郭で謙信の居城、次に一段下がったところが二の郭で養子の景虎が住み、さらに下がって三の郭にはやはり養子の景勝が屋敷を構えていた。それらの周りに譜代の武将の屋敷や、南の削平地には薬草を育てるためのお花畑などもあった。
「吉之助、この地形を活用しない手はないなあ」そんな謙信の発案で西の峰に砦を築き、それだけでは安心できないと砦に戦闘能力を持たせるために、軒猿（間者）達をまとめて、吉之助が指揮を執ることになった。
全部で十二の砦を築き、軒猿を地区ごとにに住まわせ、間者の里のような形になった。それだけにいざ戦闘となると間者としてだけではなく、戦闘要員としても動員されることも多い。普段はただの山里の農民として働いていた。
「お館さま、吉之助は城など欲しいとは思いません。こうして十二の砦を持ち、何よりも軒猿たちをまとめて『砦衆』の頭としてお仕えしていることが、私の性に合っております」
「そうか」

いつになく感傷的になっている謙信に吉之助は不安を持った。
このように話が飛びすぎる時は、まだ自分の考えがまとまっていない時で、それだけ苛立っているときだ。
「吉之助、儂はそちがうらやましいと思うことがある。全国の情報が各地から入ってくる。まるで手に取るように京や堺や西国の動きが分かるであろう。もう一つはそちの母上のことじゃ」
そういいながら、謙信は照れたように声を潜めて笑った。
今日の謙信は話が飛びすぎる。
そうしながら本題をどのように話したらいいかを探っているに違いない。
「儂らが林泉寺にいるころ、そちの母に会っておるのじゃ。とてもそちとは比較にならないほど華奢な体つきの人だった。どうしてあのような小さな人からそちのような大男が生まれたのかと思うくらいじゃ」とからかうように言った。
気まぐれが始まったと吉之助も笑ったが、今まで一度も聞いたことのない話だった。
「いつのことですか」思わず聞いてしまった。
「そうよな、林泉寺に入ってから一年ほどあとだったかな」
子どもの頃をゆっくりと回想するように視線を遠くにやって話しだした。
たまたま門の近くで庭掃除をしているときに、門の前を行ったり来たりしている女を見つけて「何かご用ですか」と尋ねると、女は困ったように目を伏せ、小さな声で「怪しい者ではございません。こちらにお世話になっている息子のことがちょっと……」と言ったので名前を聞いたところ「吉丸という悪童でございます」と言った。
「吉丸なら、今、そこにおります。呼んで参りましょう」というと「いえ、元気な姿を一目見たらいいのでございます。すぐに退散いたします」といって門の中にいた吉丸をのぞくように見て、急いで立ち去ったというのである。
吉之助も初めて聞く話だったし、母からもきいたことはなかった。
吉丸が林泉寺に入ったのは修行のためではなく、悪さばかりして手に負えない子どもだったことから、父の知り合いで林泉寺の和尚と親しい人がいて、懲らしめのために寺にでも預けたらよろしいとのことで林泉寺に入った。「下働きでも何でもさせてください」父はそう言って帰って行った。
しかし、寺での生活は八歳の少年には快適であった。部屋の中を走り回っても大声をだしても叱られないことだった。
少し遅れて、当時の越後守護代の息子虎千代（後の謙信）が入ってきたが、吉丸と差別されることはなく、一緒に庭掃除もしたし、板の間で座らされたりもした。年が一つ違いだったこともあったが、遊びについては吉丸が率先して境内を走り回っていた。
ある時、二人は庭で地面に地図を描いて、敵が攻めてきたとき、どこに隠れるかという遊びを夢中になってやっていた。それを見ていた天室和尚が、わざわざ庭の隅に土を盛って模型を作らせ、それを使って攻め方や防御の方法を教えた。遊びが勉強になったことで二人は

一層夢中になった。
その上、庭先にあったまだ若い梅の木の実を落とすのに、和尚の発案で長い竹の棒を斜めに切り落とし、それを使って、振り落とすのではなく「一個取り」という遊びをした。背の高い吉丸も、低い虎千代も条件は同じで、どちらが他の枝を傷つけずに多く採るかを競った。大抵は吉丸が勝ち、褒められるとますますうまくなっていった。それが後の「槍の吉丸」の原点だった。

「お館様だって、あんな立派な母上がおられるではないですか」
「いや。母親というのは見かけや身分の上下ではない。心が母でなければ」
「虎御前さまには心がないとでも」
「そういうわけではない。母には母の苦労があったことが今になって分かる。そうずばり言うものではない。儂も母のことはよう覚えておる。だが……」
苦笑いをしながら、謙信はまた遠くを見つめるようにして「もうよい」と急に話題をそらした。めずらしく深刻な表情になった。
「それより、吉之助、例の上田衆のことだが」とやっと本題に戻った。
今度の関東出陣に際して、いつもの身辺警護の人数を増やせというのである。
それまでは身辺警護として砦衆から五人がその任にあたっていたが、今回は人数を増やして欲しいというのである。理由についてはただの勘だという。
「承知しました。だが、せいぜい三人ではどうでしょうか」と吉之助は多くても目に付きやすいと理由を説明した。
「うん、それでよい。では頼んだぞ」
「城内に不穏な動きでも」
「まだ、よくは分からない。だが、関東出陣を決めてから城内の雰囲気が少し変わったような気がする。年をとったからかな」
少し苛立ったような言い方で、足下の一点を見つめていたが、突然ぱっと立ち上がると家の中につかつかと入り、奥の座敷に掛けてあった吉之助の愛用していた二間槍を取った。
一瞬、吉之助は身構えた。
「吉之助、この槍は使ってはならぬ。何があっても二度とこの槍の鞘を払ってはならぬ」
そう言ってからその場に座り込んで槍の石突き（槍の穂先と反対）のあたりに自らの小刀の先で文字を刻んだ。一つ一つ考えながら、小さな刻みを入れていた。
吉之助はじっと見ているだけだった。
「いいな。二度とこの槍を使うでないぞ」
そう言いながら、吉之助に手渡すと、板の間をどすんどすんと音をたてて外に出た。ゆっくりと周りの景色を確認するように見渡してから、細い道を下っていった。
すぐに四、五人の警備の男達が後を追うと、その集団とは別に少し離れて同じように農民の格好をした男達が目立たないように後を追った。

（お館さまは、少し神経質になっておられる）見送りながら吉之助の不安が高まった。
すぐに「城番」と呼ばれている間者を呼んだ。謙信の不安は外ではなく城の中にあると思ったからだ。
城番頭の源助の説明では本庄様と直江様の仲が以前よりこじれているようだという。
本庄実乃は古くから謙信に仕え、謙信が少年の頃に滞在していた栃尾城の城主でもあった武将で、吉之助もよく知っていた。直江定綱にしても長尾家に仕える名門で、共に謙信を支えている重臣である。その二人が意見の違いがあるのは吉之助にも理解できたが、関東出陣を前にした今頃になってこじれていることが理解できない。二人の性格からくる違いで、出陣の体型に意見の違いがあったのかもしれない。
「源助、二人の配下に変化はないか」
「はい、最近では樋口与六と申す若い男がしきりと動いております。今は景勝さまの御用人とのことですが、なかなかの男と評判です」
「源助、なかなかの評判とはどういうことだ」
一瞬叱られたと思った源助は、今度は慎重にことばを選んで報告した。
「直江様のもとで勉学も武道の鍛錬も熱心です。それに景勝様との仲も大へんよろしいようでございます」
「樋口と申したか？　与板の樋口兼豊の倅か」
「ご存知ですか」
「ああ、兼豊はいつも下ばかり見ている陰気な男じゃった。二、三度会ったことがある。その倅がなあ。とにかく与板衆には油断は禁物じゃ。念入りに探ってくれ。若いからと安心するな」
「承知！」源助はその場を離れると、一度自分の家に戻り、衣装を変えて春日山城に足早に歩いていった。
途中で、先ほど謙信の警護をしていった仲間とすれ違った。
「代わりは？」
「ない。気をつけて」小さな声で挨拶した。
よく晴れていたが、日も傾きかけて、雲の作る影が緑に染まった低い山に被さるようにいくつもの斑模様を作っていた。
「今日のお館さまは、少しお疲れのようでしたね」縁先に戻った吉之助にお静が声をかけた。
「ああ、そうだな」返事だけしてから吉之助はその場に座り込んで考えていた。
間もなく、警備に就いていた三人が戻ってきた。そのうちの一人が進み出て「帰り道に仙桃院さまに出会いました。どうして裏門から出入りされるのか分かりませんが、供の者二人だけで、旅から戻られたような格好でした」と報告した。
「仙桃院さまが……裏門から……。旅から戻られたようだといったな」
「確かに旅装束でございました。おそらく坂戸城から戻られたのではないかと話していたところです」

「うーん」吉之助は腕組みをしたまま考えていた。
「確かに上田からの報告では、このところ春日山との往来が多いといっていたが、今日のお館さまの不安と関係があるやもしれぬ」
「仙桃院さまは、三の郭で養子になられた景勝さまと一緒に過ごされているはずでございますよね」
「お館さまとの仲はまだ悪いのですか」
「まあな。いろいろとあったことは事実だが、だがもう今は……」
吉之助は黙ってこれまでの情報を整理しているようだった。
突然、「そうだ。吉平、明日でいいから上田に飛んでくれ。坂戸城下の様子をその目で見てきて欲しい。暮らし向きなどは坂戸の男が掴んでおるから、城の様子を探ってきて欲しい。他国の者の出入りや、取り巻き衆の動きに注意して、しっかりと見てきてくれ」
「承知！」
吉平と呼ばれた男が返事をすると同時に三人は去っていった。
日も落ちかけて、あたりが薄暗くなり、さっきまで鳴いていた鶯の声も消えひっそりとしていた。
「お静、ちょっときてくれ」吉之助は台所で夕食の支度をしていた妻を呼んだ。
「なんでしょう？」
「女の心情は男には解せぬ。そなたの考えを聞きたい」
吉之助は大きな体を沈めるように板の間に胡座をかいて、しきりに上体を揺らせていた。
「おなごというものは、いつまでも恨みを持ち続けるものか」
お静には吉之助の言っている意味がすぐには理解できなかった。
「何でまた、今頃になって？」
吉之助は真面目な顔で「仙桃院さまのことだ」小さな声で言った。
「以前、仙桃院さまを何度もお見かけしたことがございます。時々、使用人たちを甲高い声で叱っておいでででした。かなり癇のお強い人と思いました。
いまでは大切な我が子はお館さまの養子となって、景勝さまという立派な男になられましたが、それだけに母親として、うっかり声をかけられない不自由があるかもしれません。もう一人の養子景虎さまも二の郭におられます。やはり自分のお腹を痛めた我が子ですから、気にかかるのでしょう」
「そういうものかのう」
「女は母になって強くなるといいます。仙桃院さまも母としての強さと思うようにいかない気持ちが一層増したとしてもおかしくありません」
吉之助は、謙信の「母親の心がなければ本当の母親ではない」といった言葉と結びつけていた。
「母とはそんなに強欲になれるものか」
今日聞いたばかりの自分の母の小柄な姿がすーっと通り過ぎて行くような気がした。

「かなわぬ望みをいつまでも夢見るのが女でございます。我が子のことになれば一層夢中になります。戦のことばかり考えている男衆とは違います」
吉之助はお静の顔を眩しそうにみてから言った。
「今日のお館さまは、いつものお館さまではなかった。何かがあるのだが、それがよく分からん。それとも……」吉之助は一瞬、間をおいてから「久しぶりにお静に一働きしてもらおうか」と提案するように言った。
吉之助は城の台所にお静を忍び込ませることを考えた。内部の情報は女で、しかも台所に入るのが一番いい。お静は元は軒猿の一人でもあったので説明をする必要もない。
「分かりました。久々に働いてみます」お静は返事をしてから軽く唇を噛んだ。
「そう言えば、今日のお館さまの目が少し黄色がかっていたと思いましたが」お静は吉之助をのぞき込むようにして言った。
「分かっていた。だからお前に探ってほしいのだ」
「承知！」
昔の口癖が出て、二人で苦笑いをした。

（2）

翌日、明け方ちかくに城番の男が息を弾ませて駆け込んできた。
「お館さまが倒れられました」
「なに！　お館さまが？」
「そうです。たった今、厠からお戻りになるところで、部屋の前でよろけるように廊下で倒れられたのです。すぐ近衆の人たちに抱えられて部屋に入られました」
「して、その後の様子は？」
「はい、小六が見ております」
「分かった。すぐに戻って小六と交代してくれ」
「承知！」男はまた急いで戻っていった。
物音でお静も起きてきた。朝早く城に潜入することになっていたので、時間的には少し早いが既に支度を整えていた。
その装束を見て、吉之助はお静に言った。
「すぐに出かけてくれ。いいか、おそくとも夕方までには戻るのだぞ。長居をしては怪しまれる。野菜でもなんでもそのあたりの畑から抜いていけ。くれぐれも気をつけてな」
「分かりました。城番の源助との連絡は頼みます」
「わかった。押っつけ小六が戻るから、よく言っておく」
「では！」
お静は手に竹籠を持ち、背中に藁で編んだ袋を背負って出かけていった。
後ろ姿を見送りながら、吉之助は「まさか？」と小さな声で言った。

陽の昇りかけた空が、わずかに白く輝いていた。
半時ほどして、城番の小六が戻った。
「部屋に運び込まれてから、しばらくは誰もきませんでした。最初に駆けつけたのは樋口与六さまでした。その次が直江実綱さまの奥方でした。それ以降は誰も部屋には入りませんでした」
「なにっ、その二人だけか。二人とも与板の者ではないか」
「そうです。お二人だけでした」
「医者は、医者の玄庵は」
「まだお見えにはなりませんでした」
「本当か。玄庵はすぐ近くのお花畑の屋敷にいるのであろう。それなのに小六のいる間にこないのはおかしいだろう」
「左様でございます。だから源助兄が急いでそちらを見に行ったのですが、呼ばれた様子はなく、ひっそりとしていたそうです。変です」
「小六、大へんなことになるぞ。これからは近衆衆の動きには心してかかれ。源助にもこのことをしっかり伝えてくれ。それから、さっきお静が台所に入ったと伝えてくれ。頼んだぞ」
「承知！」
小六は一度玄関先にある湧き水が流れ落ちている小さな池で顔を洗ってから、また城に向かった。
小六が立ち去ったあとも、よどんだ空気が朝霧のなかでいつまでも漂っていた。
「まさか」吉之助の独り言が震えるように聞こえた。

昼過ぎになって城番頭の源助が戻った。
源助の報告は吉之助の全身を稲妻のように走り抜けた。
部屋には与六と実綱の未亡人の二人だけで、玄庵が部屋に入ったのはつい先頃だという。その間に近衆の者さえ部屋に入らず、完全な密室状態が長く続いていた。会話どころかうめき声一つしなかったという。
黙って聞いていた吉之助がようやく声を出したのは、源助が催促をしてからだった。
「儂も城に行ってみよう」絞り出すような声だった。
「いや、それはなりません。うっかり誰かに見つかって、それで済めばいいのですが、今の親方の立場では、逆に犯人に仕立て上げられるやもしれません。それほどきな臭い匂いがします。お気持ちは分かりますが行ってはなりません。私が役目を果たします、どうか城には近づかないでください」
源助の心配はもっともだった。
古い取り巻き武将の中には吉之助を知っている者が何人かはいるが、既に影の立場になって十五年近くになる。怪しい奴と言われても申し開きはできない。吉之助はただ唇を噛みしめるだけだった。

そのころになって、お静が出かけていった時の格好で戻った。
「ちょうどよい。源助も一緒で話を聞こう」
お静は背中の荷物を首をすくめて外し、片手をついて報告した。
「炊事の係の中に上田郷出身の者がおりました」
「おりましたとはどういうことだ」
「夕べの内に出かけたまま、今朝になっても戻っていないのです」
「そのことは誰もが知っていることか」
「はい、何でも仙桃院さまのご推挙で昨年の秋頃から台所で下働きをしていた男だそうです。酒が好きで、仕事をさぼるようなことも時々はあっようで、仲間内の評判はよくありません。だからいなくなっても誰も気にする様子もありません」
「……やられたな。儂としたことが抜かったな」
吉之助は肩を振るわせて低い声で呻くように言った。
「まさか、仙桃院さまのご推挙の男とは」源助が驚いたように言った。
「うーん」吉之助は言いながら謙信と姉の確執についてもう一度丁寧になぞっていた。
輿入れが決まったとき、姉の吹雪（仙桃院）は既に二十八歳になっていた。当時の結婚年齢にしては高齢であった。それだけに吹雪はこの婚姻を仕組んだのは景虎（謙信）だとあからさまに憎んだ。
そのころの越後はまだ戦乱の中にあり、越後長尾家も上田、古志、府中の三家に別れて勢力争いの最中であり、景虎の兄晴景が家督を譲ることになった時も上田の長尾政景は大反対をして挙兵し、謙信に追いつめられ、再度挙兵して誓詞を差し出した経緯がある。だからといって敵の大将に自分の姉を娶らせ手の内に入れようなどという姑息な手段には断じて反対であり、むしろ最後まで戦って勝負をつけようとさえしていた。
それなのに、吹雪は景虎の策略だとののしった。どのように言い訳をしても信じ込んでいる吹雪には通用しなかった。吹雪を説得し、承知させたのは上田寄りの兄の晴景であった。上田城の近くにある琵琶島城主で上杉家に古くから仕えていた宇佐見だとも言われているが、いずれにしても不満を持ったまま政景に嫁いで行った。
やがて男子を出産したが早世し、次に生まれたのが喜平次、後の景勝である。さらに長尾政景が近くの野尻池で水死するという奇っ怪な事件が起き、これも謙信の差し金だとする噂もあった。小さい喜平次を不憫に思った謙信が養子にしたが、ここでも屋敷の場所で姉との間にいざこざがあった。だが、その頃には越後は既に景虎（謙信）の下にほぼ統一されており、さすがの姉も以前のような我が儘は許されなかった。

長い沈黙が続いた。
お静も源助もじっと吉之助を見ているだけで声をかける隙もない。大きな肩がぴたりと静止したまま、まるで人間の形をした大きな岩が板の間に置いてあるような錯覚さえした。
「源助……」絞り出すような声だった。

「もう一度聞くが、部屋には二人だけだったのだな」
「はい、近衆の人さえ廊下でただじっと座っておられました」
「では、そこで大騒ぎになったということもないのだな」
「ひっそりとしていました」
吉之助はまた黙った。
「源助、終わったようだな」
吉之助はそこでふーっとため息をついてから今度はゆっくりと話し出した。
「源助も初めはお館さまの間者だった。だから分かるであろうが、仕える人の指示が全てじゃ。上からの命令が唯一自分の行動や考え方の基になる。儂も同じようにお館さまのために必死に考え行動してきた。決して上杉家や長尾家に仕えたわけではない。今、そのお館さまが亡くなられたからには仕える人を選ぶのは儂の勝手だ。そうだな」
吉之助は一つ一つ自分に言い聞かせるように話した。
「その通りでございます。我らの勝手でございます」
「でも、吉之助は独りではございません。多くの砦衆の親方です。一介の軒猿とは違います」
お静が叱るような目で言った。
「分かっておる。だから儂が決めるのじゃ、それで良いのじゃな」
「我々にとっては、上杉や長尾ではなく大浦吉之助が主人です」
吉之助はまた黙った。
しばらくして、吉之助は思い出したように立ち上がり、奥の座敷の鴨居に掛けてあった愛用の長槍を小脇に抱えて、厳しい顔で戻ってきた。
二人とも吉之助が槍を持ったまま駆け出しそうだったので急いで止めた。
「うろたえるな。見るだけじゃ」
そう言って槍の石突きあたりを検分するようにみていた。
（一七・四三・四五・・六七・三二・二五・・・）と彫ってあり、吉之助はしばらく考えていた。
「上杉暗号」と呼ばれた初期の頃の暗号で、元々は吉之助が京や堺にいる間者との連絡用に謙信の助言を入れて考案したものである。
いろは四八文字を将棋の盤のように横七つ、縦七つの枡目の中に埋めたもので、実際には和歌などと組み合わせて使っていた。
「お館さまは、重大な決意をもっておられたようだ。覚悟をされていたのかもしれない」
そう言いながら源助にも数字を見せた。
源助は吉之助ほどとっさに読むことはできなかったが、指を折りながら「どういう意味でしょうか」と聞いた。
「あの時、お館さまはこの槍を使ってはならぬときつく仰せられた」
「権現の下に宝あり、戦はするな……ですよね」
「その通りじゃ。こうなることを予見されていたのかもしれない。自分でも気づくのが遅れ

たという無念の気持ちがあったのかもしれない。だが確信までには至らなかった。そこを斟酌するのが儂の役目だったというのに。無念じゃ」
「親方の気持ちは分かります。だが、今となってはどうにもなりません。今はお館さまの気持ちを無にしないようにするしかありません」
また長い無言の間があった。
「そう言えば、お館さまは自分の肖像画を描かせたそうですね」
「そうか、そこまで読んでおられたか。それにしては我らは浅かったな」
吉之助はもう一度大きな体を横に揺らしながら下唇を噛んだ。
また沈黙。
「親方、殉死などと考えておられるのではないでしょうね」源助がそっと言った。
「そうですとも、砦衆が困ります」お静も言った。
「分かっておる。いまさらどうにもならぬ。分かっておる」
それだけいうと槍を元の座敷に持っていき、ドサッと落ちるように胡座をかいて、膝の上に槍を置いたままじっと考え込んでいた。
「そっとしておきましょう」
お静が言うと源助も腰を上げて「後はたのみますよ」といって立ち去ろうとすると、吉之助が呼び止めた。
「源助、しばらく待て」と言ってから文箱から小さな紙片を取り出し、文字を認めた。
「これを玄庵どのに届けてくれ。必ず本人に手渡すのじゃ。混乱しているやもしれぬが、必ず本人に手渡すのじゃ。よいな」
吉之助は細い竹の一節を源助に渡した。一見、ただの竹の棒だが、吉之助が良く使う方法で、中に小さな紙片が入っていて「三にしちこさんろくさん、にろうさんここいなろくいにに」と書いてある。
源助は大事そうに懐に入れて静かに屋敷から出て春日山城に向かって一歩一歩土を踏みしめるようにして細い道を歩いていった。

（3）

一日置いた昼過ぎに、玄庵が吉之助の屋敷をそっと訪れた。
「大浦どの、面目ない。この始末じゃ。すまん」そう言って深々と頭を下げた。
医者として、特に酒好きなお館さまに十分に配慮することを吉之助に言われていたのにこんな形で無にしたことを詫びた。
「玄庵どの、もうよい。終わったことだ。それより少々お聞きしたいことがある。玄庵どのがお館さまを診察したのは昨日の昼頃と聞いておりますが真実ですか」
「その通りです。呼ばれて床に行ったときは、実はもう脈は弱っていました。大浦どのもご承知のとおり、死に近くなるほど体温も下がり脈も弱くなります。戻るほどの強さではあり

ませんでした」
「本当に？」
「確かに」
玄庵はそのときの様子を詳細に話した。床には吐瀉物などもなく、乱れた様子も匂いもなく、それがおかしいと思ったこと、玄庵が万一のためにと特別に処方した薬も枕元になかったことなどを話した。
吉之助は、ただ腕組みをしたままじっと聞いていた。
「今、吐瀉物といわれたか？」突然思い出したように聞いた。
「左様、見たところ顔面の血も引いて生気のない顔であった。迎えにきた近衆衆に様子を聞いたのだが、部屋に引き入れたときに嘔吐されたと聞いたが、その痕跡はまったく見あたらなかった。きれいに繕った気がした。そこでもう一度脈を取り始めたのだが、そこまでだった。急に下がって良いといわれ、何も言わずに引き下がった」
「やはりそうであったか」吉之助はそう言ったまま、また黙った。
「玄庵どの、もし虫気（脳溢血）であったなら、急に体温がさがるものですか」
「いや、虫気ならば、それほど急に体温はさがりませぬ。既に心の臓が弱っていて脈の弱さが気になりました」
そこまで言うと玄庵は吉之助の顔をじっと見つめながら「別の理由で倒れられたと思っております」と下を向いたままつぶやくように言った。
「もう、絶命に近い……」
「左様、無理でしょう」玄庵はきっぱりと言った。
「大浦どの、上田衆の反乱でしょうか。それともただの権力争い……」
「……両方じゃ」
吉之助は腕組みをしたまま諦めるように、自分に言い聞かせるように言った。
「それよりも、玄庵どの、今日は内密に来られたのであろう。早々に屋敷に戻られよ。手の者が警護いたす故」
「かたじけない」そう言うと玄庵は急いで立ち上がり、歩き始めた。
その歩調に合わせるように吉之助は並んで「玄庵どの、御身の安全もお考えあれ」とそっと続けた。
「この先どのようなことが降りかかってくらやもしれぬ。早々にあの屋敷から退散されるのが得策かと」
「まさに！」
「もう一度呼び出しがあるやもしれん。それが終わってからでもよろしいかと。みんなの前で最後の確認をする必要がある。そこまでが医者の仕事じゃ。それが終われば医者に用はなくなる。そのときに、責任を取る形で、早々に屋敷から退出されるのじゃ。行き先は儂が用意する。念のために若い小六を弟子として就けてもよい」
吉之助は玄庵の肩をそっと叩いた。

「かたじけない」
玄庵は急ぎ足で城内にある自分の屋敷に向かった。
警護をしていった部下が屋敷に戻ったことを報告したのは半時もしないうちだった。

その日の夕方に吉之助は城番頭の源助を呼んだ。
「源助、長い間ご苦労だった。明日にも全員を引き上げる。もう城での我らの役目は終わった。そのことをみんなに伝えてくれ」
「承知しました」一瞬の間をおいてから源助が答えた。
「もう、城に行くことはない。みんな家に戻って田んぼや畑や山仕事に精を出してほしい」
「京や堺の連中は？」
「既に指令を出した。ここに戻るも自由、彼の地で商いを続けるのも自由。もう、軒猿としての仕事はせずともよい。ただし、砦衆の伝達の道だけは失わないようにしたい」
吉之助は源助の肩に手をあてて「よう働いてくれた。礼をいうぞ」と言ったまましばらくは無言だった。
「親方も……」
源助は躊躇いながら「親方、最後の報告です」と大きく深呼吸をしてから「景勝さまが宝物倉を占拠されました」と小さな声で告げた。
「ほう、さすが上田衆は目ざといのう」と唇を結んだ。
「源助、これからまた越後は戦になるやもしれん。取り巻き衆も年を取った者もおる。血気盛んな若造もおる。ただですむとは思えない。せっかく越後が一つになったが、次の者がおらん。親方の唯一の失敗じゃ。」
「お館さまはそのことも分かっておられたのでしょう？」
「そのようだな。だからこそ二人の養子のことで悩んでおいでだった。だが、その後ろ盾が問題じゃった。それが一番の悩みだった。
どんなに頭で分かっていても、心の中の何かが後ろ盾で勝手に動き出すことがある。それぞれの人間の持って生まれた種火のようなものだ。何かのきっかけで勝手に火がついたように燃え上がる。その火に油を注ぐのが後ろ盾じゃ」
「良くわかりませぬ」源助は申し訳なさそうに小さな声で言った。
「後ろ盾だけではないぞ。取り巻き連中もおる……」
源助は一層分からない。
「源助、これから争いが起こるやもしれん。そうなってもわしらはこの山の中で何事もなかったように生きるのじゃ。幸いお館さまの遺産もある。だから安心してよいぞ」
「また戦だからと兵役の要請はないのでしょうか」
「ああ、こんな山の中だ。我らにまで動員が発せられることはあるまい。それに砦衆のことはお館さま以外にはほとんど知るものはおらん。それにこれからは世の中も変わる」
吉之助は源助を相手にこの先どのように生きていくかを手短に話した。

「戦乱の世は間もなく終わり、武術ではなく智恵のあるものが勝つ。智恵の元は情報と学問じゃ。幸い我らには情報を握る術と伝達の手段がある、それを生かせば、山中にいても天下の様子が分かる。決して武器は取らぬ」
「これからは戦ではなく、山を相手に生きるのですね」
「不満か」
「いいえ、あまりにも殺伐とした中に長い間身を置いていたものですから」
源助はそっと頭を掻いた。
「大丈夫だ、すぐに慣れる。この山が教えてくれる。学問と心意気が必要じゃ。そのための手段をこれから考える」
二人は暗くなった庭先に出た。
「源助、この闇も明日になればまた明るくなる。太陽に照らされた若葉が眩しいぞ」
二人は無言で闇を見つめながら、いつまでも立っていた。

（4）

その後、吉之助の予想どおり、二人の養子の間で跡目相続の争いが起こり、当初は諸将の多くが景虎側についた。これは景虎の人望というよりは景勝の強引さに辟易していたからとも言われるが約一年の争いの後景勝側が勝利し新しい春日山城の主となった。
景勝はそれまでの譜代の諸将を閑職にまわし、重要な地位にはほとんど上田出身の者をあて、かっての砦などには見向きもしなかった。
二年後、春日山の様子も一変し、謙信時代のような活気が復活しないドロンとした空気が淀んでいたが、山々は若葉が活き活きと覆っていた。
医者の玄庵が海で獲れた魚や海産物を持って、小六と一緒に吉之助の屋敷を訪れた。
「大浦どの、城下に比べるとこの里はまるで桃源郷のようですな」
下に見える民家と近くの山々の緑、吹き抜けていく爽やかな風には人の心を癒す香りがあると話した。
ついこの間まで醜い争いのあった御館付近はまだ雑然としていたが、人間の争いなど飲み込んでしまう広大な景色が目の前にあった。
「玄庵どの、儂は学問所を作った。その前に狼煙台などは全部破壊した。それに近々、京から茶人を招いて茶の湯などもやってみようと考えておるのじゃ」と笑った。
「全く、大浦どのは不思議なお人じゃ。そんな大きな体で茶の湯など」と笑ったが「学問と文化ですかな」と吉之助の顔をのぞき込むようにして聞いた。
「左様、教養と心意気です。物欲の代わりになるものがないと人は愚図になりますからなあ。そうすることでこの里は長く生きられます」と小声で笑った。
「そこで、玄庵どのに頼みたいことがあるのじゃ」
南の傾斜地を利用して薬草畑を作り、秋には収穫して長い冬の間に薬として調合すること

を考えたのだと玄庵に協力を要請した。
「なるほど、それはいい考えじゃ。そうだ、最近では小六も一人前に薬の調合もできるように腕を上げている。小六に任せましょう」とそばにいる小六に言った。
吉之助はこれで三つ目のよりどころができると喜んで玄庵の手をとった。
「それにしても、大浦どの、おかしな因縁ですな。元はといえば、お館さまの腹下しの薬を調合したのが縁じゃったのう」
「左様でしたな」二人はまた手を取り合ってまるで子どものようにはしゃいだ。
眼下から吹き上げてくる風がそっと二人の間を抜けていった。
「今の風、ひょっとしてお館さまの通って行かれた後のようじゃったな」
確かにそんな気がしないでもなかった。
「大浦どの、儂がよく効く薬を作ります。それを街道の中継地を使って京や大坂方面に運びなされ」

帰り道、玄庵と小六は前と後になって細い道をゆっくりと歩いていた。
「あんなに大声で笑われた親方は初めて見ました」小六が言うと「そうじゃな。確かにいつも苦虫を噛むような顔じゃった」と玄庵も同意した。
「小六、これからが我らの戦になるぞ。いい薬をつくろうぞ」
「はい」小六もはじけるように返事をした。
後方で鶯が思い出したように鳴いた。